
流れ行く時の狭間

東風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流れ行く時の狭間

【著者名】

N4553B

【作者名】
東風

【あらすじ】

死を望む少女と生を望む少年。一人の運命は交わり、そして……。

昔、私は人間だった。

どこにでもいる普通の少女だった。

家族がいて、友達がいて。

家事を手伝つたり、遊んだり、勉強をしたりした。 好きな男の子のことではしゃいだり、将来を夢見たりした。

もう遙か昔のことだ。

すべては虚しい過去。

割れた杯がもう元には戻らぬように過ぎ去つていつた幻影だ。

家族も友人も、もうとおに死んだ。

私の生まれた国は従属を求めた大国に愚かにも抵抗し、圧倒的な国力の差によつて滅ぼされた。

戦乱の最中私の故郷は灰と消え、父母の墓さえ残つていない。

焦土となつた故郷に私以外立つ者はなかつた。

これが神の下した罰なのだ。

私の時はある日から止まつてしまつた。

私は老いない。

私は死なない。

私は望むものを手に入れ、代償に私の大切な一切を失つた。

私の愛しい人々が、故郷が、物が、死に絶え枯れはて壊れていくさまを見た。 これ以上の苦痛があつつか！

身を切られるよりもなおひどい。

すべてが朽ちていくさまをただ見守ることしかできず、その後を

追い自分が死ぬこともできない。

私は罪を犯した。

私は永遠の命を手に入れた。

神は私を罰し、私に呪いをかけた。

未来永劫を生きよと。

無情な時の流れの中で為すすべもなく流され、溺れ……。

死ねる日を夢見てただ生きる。今はもうただそれだけ。

死を望み、死に生きる。生を捨て去り、虚無とかす。

豪奢に飾られた部屋の天蓋付きの豪華なベットの中で、少年は身を横たえたまま絹地の張られた天蓋を見つめていた。

今部屋には少年一人しかいない。

先程まで少年の世話をするためにいた侍女や従僕達は一人になりたいからと黙つて下がらせた。

もう彼らが見せる偽りの笑顔には耐えられなかつた。

「大丈夫。すぐによくなりますよ」

「もうすぐ治りますから」

すぐつていつなの？

幼い頃、繰り返しした問い。

いつまで経つても快方に向かわぬ自分の体に嫌気がさし、自由に外を歩き回れる日を夢見ていた幼い日。けれど問われた人間達はいつも曖昧に笑うだけで明確な答えを黙つてはくれなかつた。

少年は成長するにしたがい彼らは答えなかつたのではなく答えられなかつたのだと知つた。

相変わらずベットから離れられぬこの体。

咳き込むつどに全身に痛みがはしり、この頃は体を少し動かしただけで息があがる。

確実に弱つていく体。

その行き着く先はあきらかだ。

自分に向かつて微笑む人々。

しかし表面で笑うその目の奥に潜む苦渋や憐憫に気付けぬ程少年はもう子供ではなかつた。

「外へ出たいなあ……」

我知らず言葉が漏れた。

頭だけ動か

して赤い絹のカーテンを両脇に垂らした窓を見る。

透明なガラスの向こう。春の日の暖かな陽光が降り注ぐそこには少年の憧れてやまぬ世界が広がっている。

いつか城を出て、城壁の外に行く。

幼い頃からの悲願は果たされないまま終わるのだろうか。

少年は窓を睨んだ。

いや、このまま死ぬ気などせららない。

どうせ死を待つだけの体なら最後に一度だけでも外へ行きたい。
一日だけでも外を見たい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4553b/>

流れ行く時の狭間

2011年1月9日01時53分発行